

豊田市郷上遺跡出土の瓦塔

永井邦仁

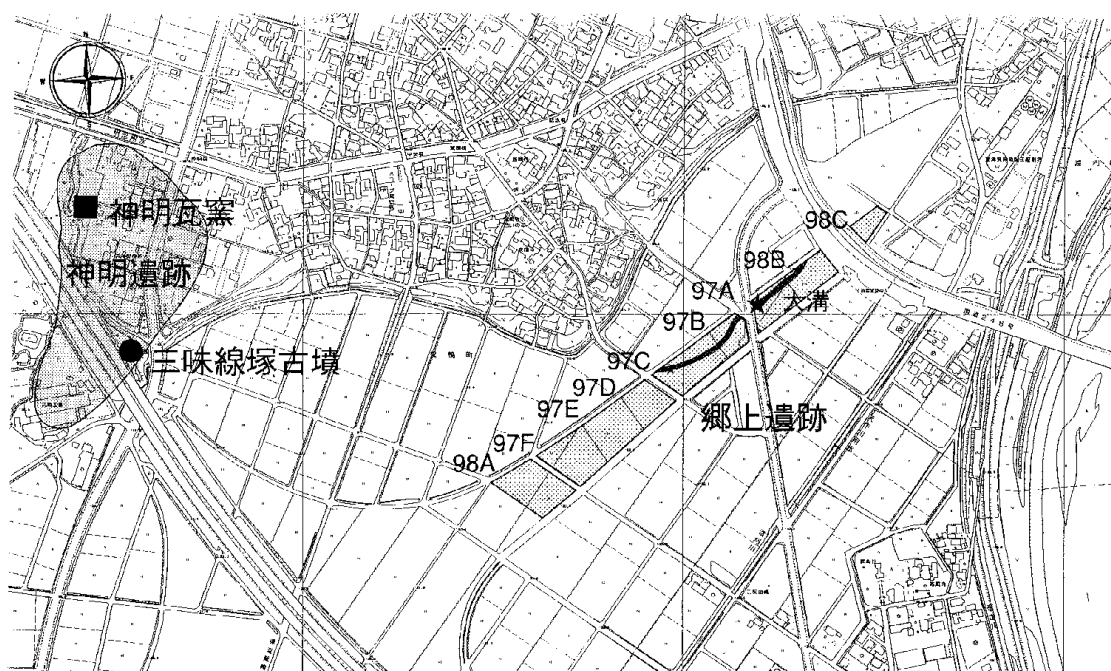
1. はじめに

愛知県豊田市内では、矢作川西岸の低地を中心に(財)愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を続けている。その一つである市内鷺鴨町所在の郷上遺跡は、沖積地上に展開する古墳時代中期(5世紀代)から江戸時代前半までの複合遺跡である。1997年度の調査で古墳時代から平安時代に存在した大溝から瓦塔が出土している。瓦塔とは、木製多層塔を模した土師質ないしは須恵質に焼成された奈良～平安時代の土製の塔のことで、軸部・屋蓋部・相輪部などの各部品から成り、多くは五重塔である(註1)。東日本を中心に出土例があるが、尾張地方を中心として愛知県は、関東・北陸・信濃地方とならんで出土の多いことで知られている。この瓦塔については1997年度の年報において写真が掲載されていたが、本文中ではふれられてなかった。このたびこの瓦塔を詳細

に観察する機会があり、その結果2基の瓦塔が存在したこと、そのうち1基は初軸部分を中心に出土していることなどがわかった。

2. 瓦塔の出土地点

瓦塔が出土した大溝は、97A・B・C・98B区の各区で確認されている。遺跡を北東から南西にむかって延びており、遺構確認面での幅5～15m、深さ1.5mの規模をはかる。調査の時点では古墳時代中期に最初の掘削があり、8世紀後半に掘り返され、最終的に9世紀後半に埋没したと考えられている。大溝周辺の遺構として、97A区では古墳時代後期に属する竪穴建物群が確認されている。奈良～平安時代に属する遺構は、97E区のほか、98B区でも確認されているがいずれも大溝の東側である。したがって大溝は当該期集落の北から西側を画する付置にあるとみられ、

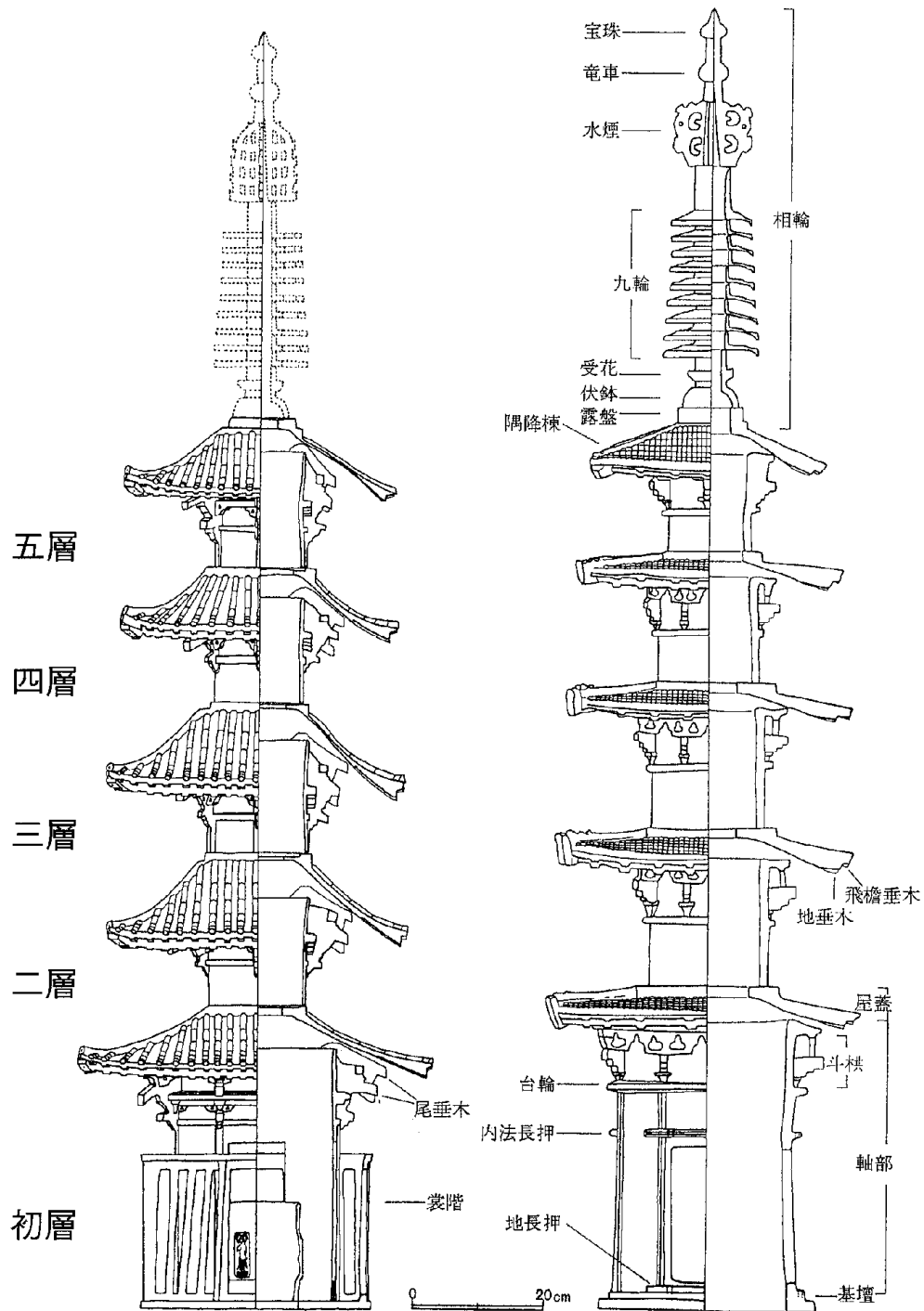


第1図 郷上遺跡調査区と瓦塔出土地点(星印) (1:10,000)

集落の中心は調査区より南東方向にあったと考えられる。

瓦塔は総破片数で51点を数える。97A区で集中して出土しており、1点だけ97C区で出土している。大溝出土遺物は、8世紀後半の掘り返し

以降の堆積を上層としているが、瓦塔は全て上層からの出土である。瓦塔は全て小片と化しており、破断面を含め摩滅が進んでいた。しかし後述するように、初軸部分がある程度まとまって出土していることから、ほぼこの地点において廃棄さ



第2図 瓦塔各部の名称 (高崎1989に追加)

れたものと考えられる。ただ相輪などの上層部分が未確認であるため、廃棄の時点で完全に揃っていたものかどうかは不明と言わざるを得ない。整理作業が中途であるため詳細については言及しえないが、共伴した遺物の中に黒笹 90 号窯式に属する須恵器香炉蓋があり、瓦塔が溝内に廃棄された時期がおおむね 9 世紀後半以降と推定される。

3. 瓦塔の観察

前述したように出土した瓦塔は小片がほとんどであり、かろうじて瓦塔の一部と判断できるものばかりであった。したがってここでは主要なものに限って図を掲載し、観察内容を記す。瓦塔は軒先の表現方法の違いなどから 2 基が混在していると考えられる。ここではそれぞれ瓦塔 A・瓦塔 B と仮称する。

(1) 瓦塔 A

出土瓦塔のうち一見して焼成の違う一群がある。表面は明褐色、内部は明赤褐色を呈し、瓦塔 B に比して堅致である。そのような焼成のものを抽出したところ、屋蓋部のみが数点あることがわかった(第 3 図 - 1・2)。いずれも屋蓋部軒先が残存しており、そこに注目すると、軒丸瓦当の下に出っ張りが表現されている。何を表現したものかは不明である。これは後述する瓦塔 B の軒先表現にはないものであり、表面の状態とともに瓦塔 A の特徴である。

丸瓦列は瓦塔 B 同様、粘土紐貼り付けによる独立した列で表現されている(註 2)。半裁管状工具の凹面で丸瓦列をなでつけ、さらに凸面で平瓦部分をやや強くなでつけている。したがって瓦列は直線的な表現になっており、しかも均等な間隔が保たれている。瓦の継ぎ目は表されておらず、すっきりとした印象をうける。

垂木は削り出し範囲に切り込みを入れたのち削

り出して表現している。

(2) 瓦塔 B

瓦塔 B として一群は、瓦塔 A に比べて軟質の焼成で脆く、灰白色を呈する。

屋蓋部

軒先の状況がわかるものが 2 点出土している(第 3 図 - 3・4)。瓦当の表現は単純化され文様の表現はなされていない。丸瓦列は瓦塔 A と同じ方法で表されるが、軒先同士と比較するとこちらの方はやや丸瓦の盛り上がりが高いようにみうけられる。垂木は二重軒を表現している。瓦塔 A では第 1 図 - 1 を見るかぎり、二重軒の可能性はないので、これも両者の違いのひとつである。

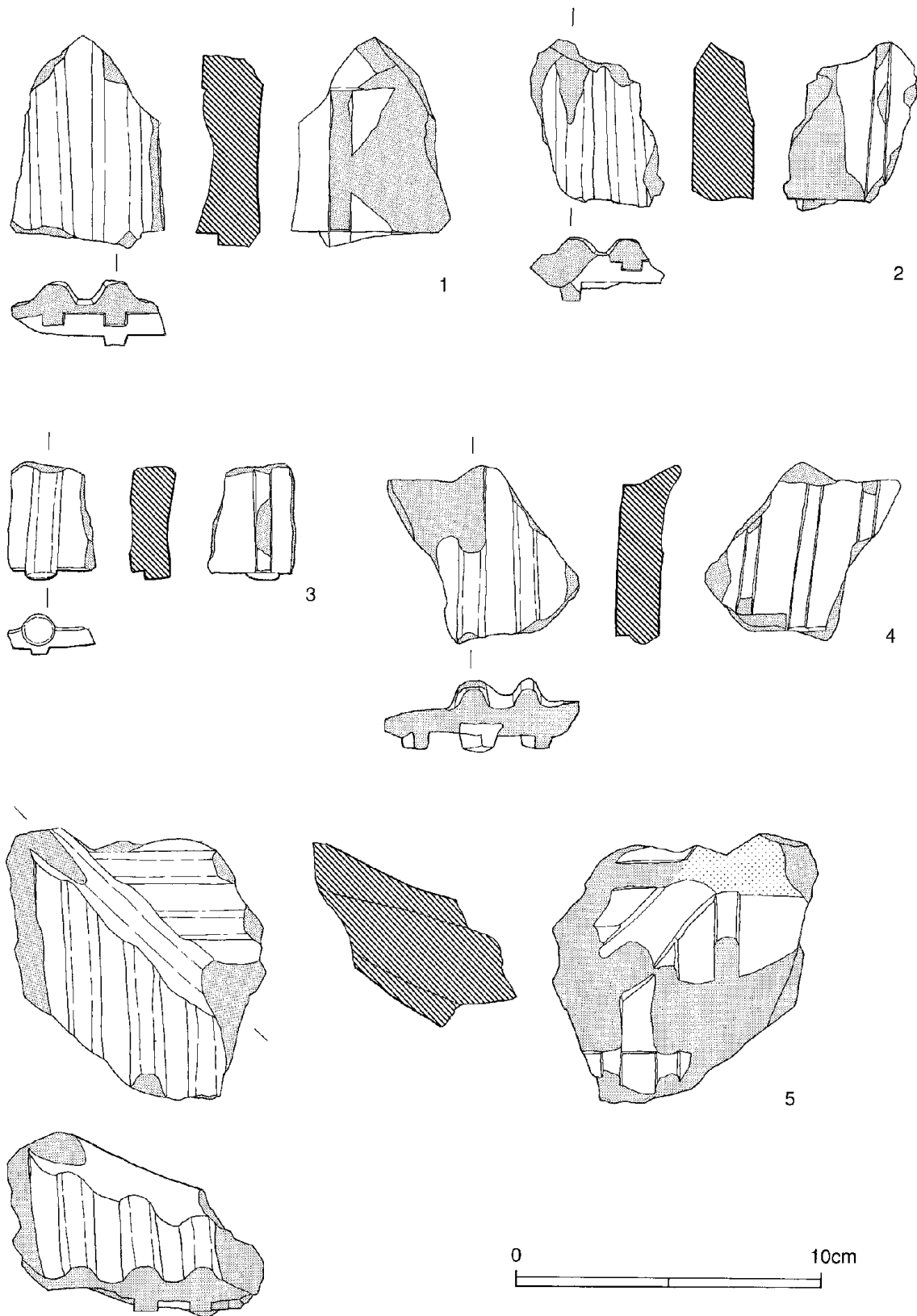
隅降棟・隅垂木は粘土紐を貼り付け、隅降棟は指などで、隅垂木は工具で削り出して表現している。隅棟は図示した 2 点のみであるが、うち 1 点(第 3 図 - 5)は 97 C 区で出土したものである。離れたところで出土した理由は推して知るべしだが、第 4 図 - 1 の隅棟と比較して大差なく、同一瓦塔の一部と考えて差し支えない。

第 4 図 - 2 は屋蓋の頂部である。丸瓦の一部が残っており、降棟が始まる位置がわかる。頂部は正方形であり、多くの例では中心に心柱を通すためとみられる円形の穴が開いているのであるが、その有無については定かではない。裏面は斜めに立ち上がっており、静岡県三ヶ日出土の瓦塔(第 2 図の左側)に似た断面になる。

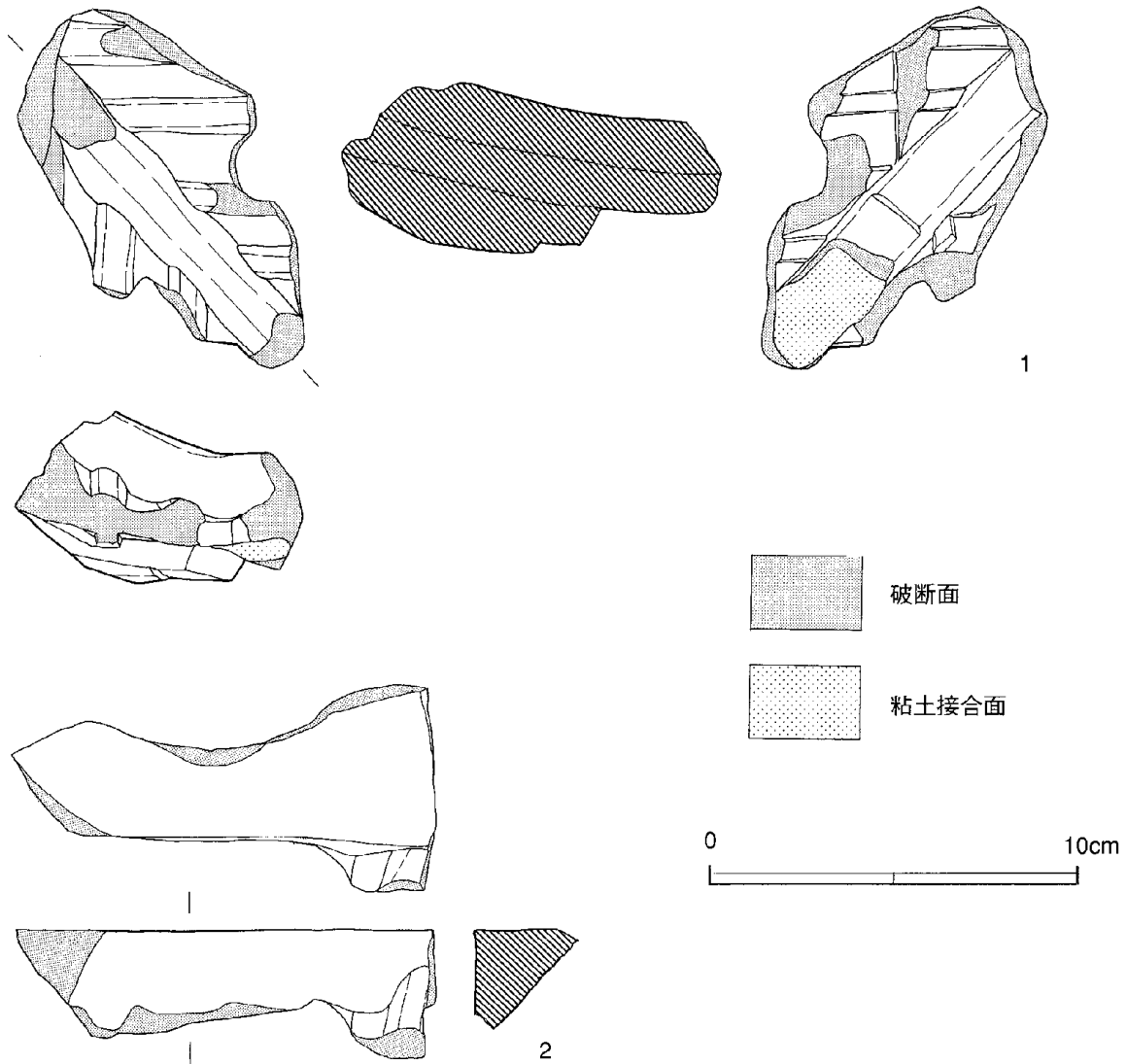
軸部

初軸に相当する部分が主に出土している。軸部は壁体や柱の部分からなる本体と、それにとりつく斗栱部分とにわけてみていく。

軸部本体は粘土板を組み合わせで成形したとみられる。表側は扉口の柱と内法長押を垂木同様切り込みを入れた後に周囲を削り落とすことで表現



第3図 瓦塔屋蓋部実測図① (1:2)



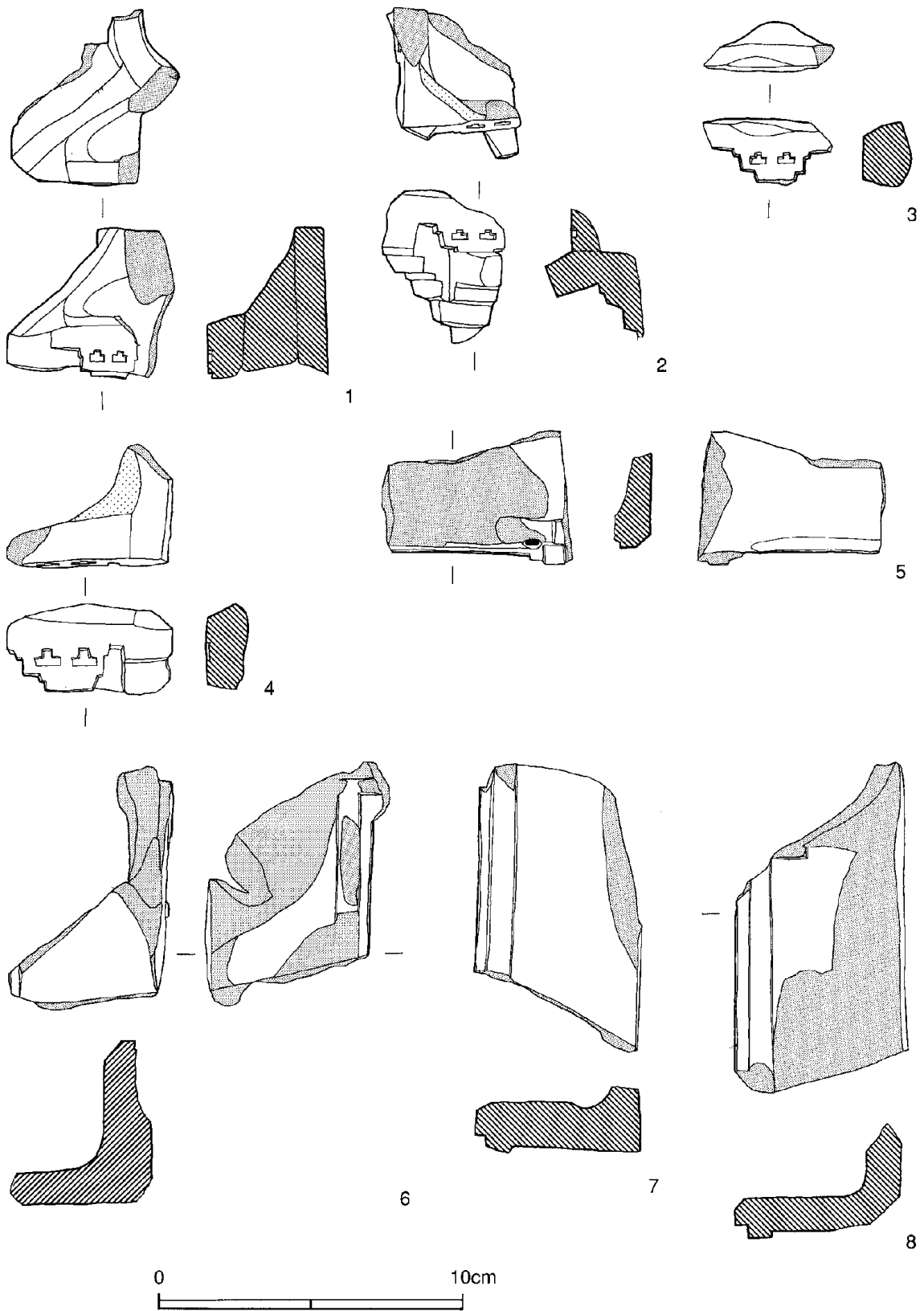
第4図 瓦塔屋蓋部実測図② (1:2)

している。内側は指で横方向になでである程度である。四隅の柱は表現されていない。なお、台輪と地長押および基壇の有無・形状については不明である。扉口に直径5mm程の柱ずりの穴が穿たれているものがある。(第5図-5)。

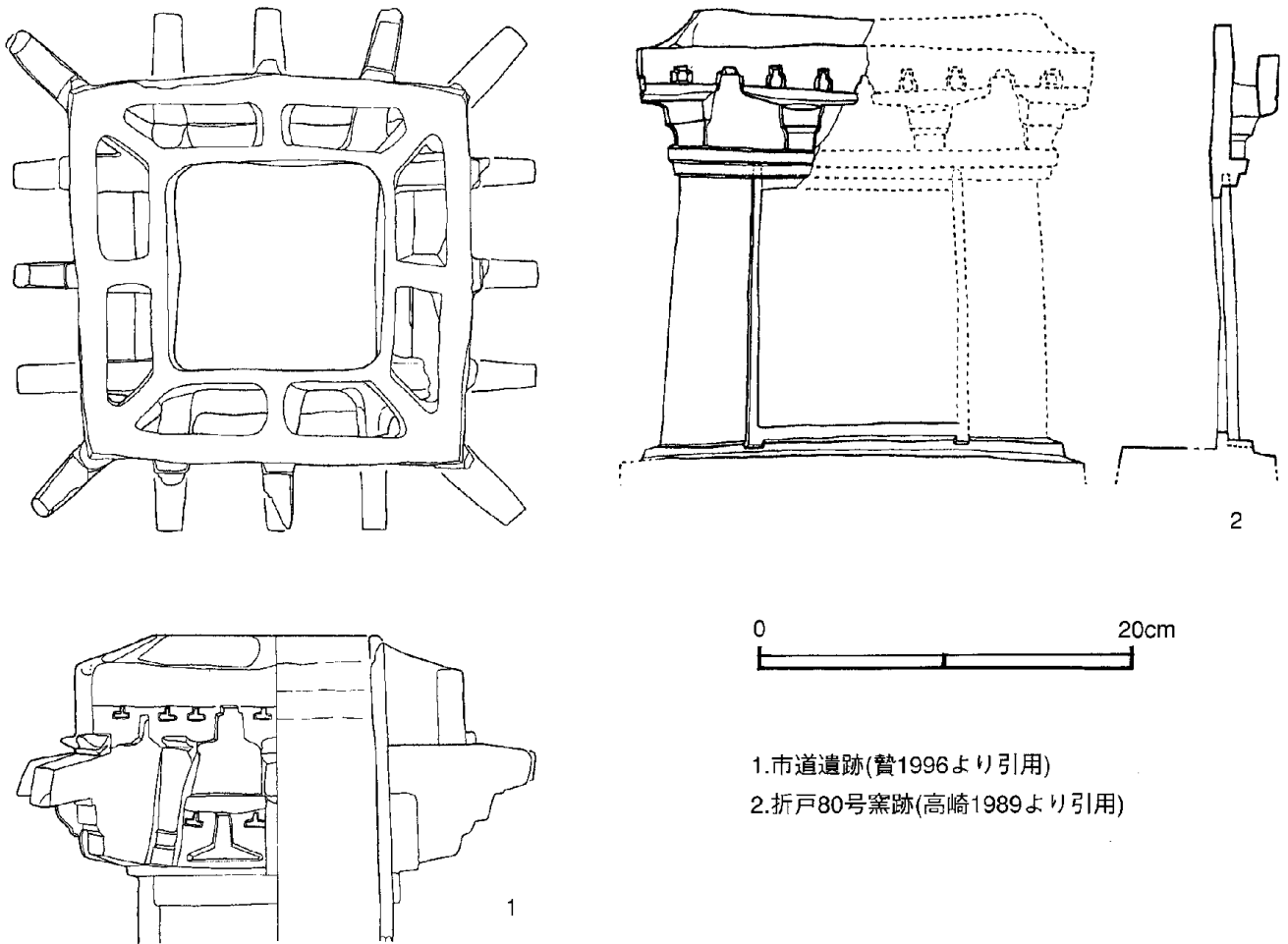
しかし、第5図-6もこれに該当する位置にあるのだろうが、穴はない。正面扉口だけに施されているのであろうか。

斗栱下部は粘土塊を貼り付け、削り出して表現している。二手先になるとみられる(第5図-2)。尾垂木は短く、しかも隅で斜め方向のものは省略されている。上部は本体周囲に板状粘土の枠を作り、同じくヘラ削りで成形し、凸形に型

押しする(第5図-1~4)。この凸形には第5図-1~3と第5図-4の大小2種類があり、大きいものの方が浅い。それぞれ別の瓦塔のものかとも思われたが、いずれも焼成は同一である。大きな凸形型押しの方は、全体的に斗栱が大きめであることから、それは初軸の斗栱であり、小さい方はそれ以外の軸部のものと判断した。初軸の表現を大きめにつくり、上層のものを小さめにつくることは瓦塔一般によくみられる(第2図を参照)。四角に当たる斗栱の裏には接合粘土があり、これで本体とつながっている(第5図-1・2・4)。



第5図 瓦塔軸部実測図 (1:2)



1.市道遺跡(贅1996より引用)
2.折戸80号窯跡(高崎1989より引用)

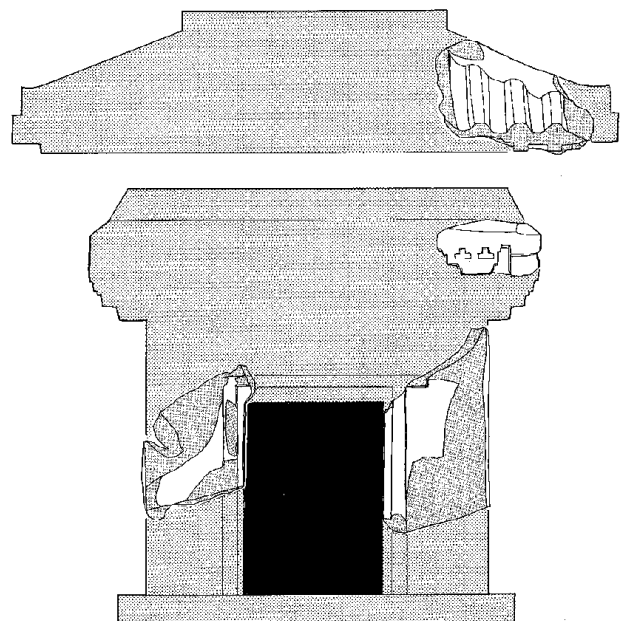
第6図 尾張・三河地方出土の瓦塔軸部 (1:4)

4. 初軸の復元

以上の観察をもとに、比較的各部がまとまって出土しているものと比べてみて、瓦塔Bの初軸のおおよそのかたちを復元してみたい。

市道遺跡では、上層の軸部上部が良好な状態で出土している(第6図-1)。軸部本体と斗拱との関係は郷上遺跡瓦塔と同じく、上から見ると2つの枠があるように見える。しかし市道遺跡瓦塔では四隅柱が表わされているのに対し、郷上遺跡瓦塔では省略され、斗拱表現もより小さく、簡略になされている。市道遺跡瓦塔は、報告で3期とされる9世紀前葉を上限とするの瓦溜まりですでに廃棄された状態にあったようである。(註3)

窯跡出土で軸部が復元可能なものに折戸80号窯跡出土の瓦塔がある(第6図-2)。こちらは



第7図 瓦塔Bの初軸と屋蓋の復元(約1:4)

折戸 10 号窯式の段階に含まれる須恵器が相伴している（註 4）。軸部本体と斗拱上部は少なくとも四隅でつながっており、市道遺跡瓦塔・郷上遺跡瓦塔と共通する。一方斗拱下部は尾垂木がなく、また軸部本体の四隅に柱がなく、郷上遺跡瓦塔に比べてより簡素である。

5. まとめにかえて

前に若干の比較をした近隣の出土例から、単純に「写實的から簡素へ」という図式でみれば郷上遺跡瓦塔は市道遺跡瓦塔と折戸 80 号窯跡瓦塔の間に位置づけられることになる。しかしそれは早計に過ぎる。斗拱や屋蓋の形態変化に注目するのは当然であるが、それらを組み合わせた上で編年として構築していく必要があろう。近年関東地方を中心として屋蓋部瓦表現や斗拱表現の変化に着目して編年試案が示されている（註 5）が、愛知県を中心とした東海地方の瓦塔をこれに当てはめるのは躊躇される。土器を須恵器と土師器で分けるように、少なくとも窯で生産された瓦塔とそれ以外の瓦塔を分けていく作業が必要である。

高崎光司は、東海地方の瓦塔を概観して、「写實的で表現が細か」く、「屋蓋に関しては、丸瓦を棒状粘土で表す例が多く、瓦当面まで表現の及ぶ資料も少なくない」と述べている（註 6）。以上の形態的特徴は瓦塔が生産され続けた間、東海地方の大方においては継承されていたようである。それはこの地方では須恵器窯での瓦塔生産が盛んであったこととも関わってくるであろう。

そこで形態だけでなく成形方法の点でも、注目されるのが、美濃と尾張で出土する一部の瓦塔である。これらは、軸部とその直下にくる屋蓋部をつなげて 1 つの部品として成形している。例として美濃地方では岐阜県各務原市各務

廃寺・稲田山古窯跡群 13 号窯跡（註 7）があり、尾張では音楽寺遺跡（註 8）が顕著な例である。他、勝川遺跡例もその可能性がある（註 9）。これら地域的なまとまりをみせる特殊な成形方法については、あらためて検討してみたいと思っている。

謝辞 郷上遺跡瓦塔の存在について教え下さり、検討の機会を与えていただいた鈴木正貴氏に感謝申し上げます。また、伊藤秀紀、北村和宏、酒井俊彦、樋上 昇の各氏にもいろいろとご教示いただいた。記して感謝の意としたい。

註

（註 1）瓦塔の定義については、筆者自身、現在のところ整理がついていないのが実情である。おおむね瓦塔として研究の対象となっているのが、全高 1.5 ~ 2 m 前後の須恵質・土師質に焼成された五重塔であり、それにならっているにすぎない。愛知県内ではそれらとは異なる土製・陶製の塔がある。

岡崎市北野廃寺では、緑色の釉がかかった小塔屋蓋の一部が出土している（稲垣晋也・斎藤嘉彦 1991）。瓦塔とは大きさがかけ離れているが、時期的には平安時代前半と推定されている。また、清洲町土田遺跡では土製宝塔が出土している（高橋 1983）。同類は津島市内でも採集されており、屋蓋部だけみれば瓦塔と大差ない。こちらの時期は中世とみられている。

以上のような「塔」のほか、今回瓦塔の範疇に含めた六角塔はどう扱うべきか、今後の検討課題である。

（註 2）本例は、よく「粘土紐貼り付け」と判断される典型例であるが、断面を観察しても粘土を付加した痕跡がうかがえない。当然粘土接合面で剥がれた箇所も見いだせない。胎土がかなり精良

であるため接合部が消されてしまっているのかもしれないが、納得がいかない。筆者は垂木同様、厚めの屋蓋部粘土から平瓦部分を削り出した可能性も否定しきれないと考えている。

- (註3) 贅 1998
- (註4) 斎藤 1978
- (註5) 池田 1996・高崎 1989・善端 1994 など
- (註6) 高崎 1989
- (註7) 井川 1995・各務原市教育委員会 1983 など
- (註8) 宮川 1996
- (註9) 勝川遺跡瓦塔の軸部は、その下端が外側に反るような断面を呈し、そこで破断している。

ここに屋蓋がとりついたらと見られる。

参考文献

井川祥子 1995 「岐阜県内出土の瓦塔」『博物館だより』岐阜市歴史博物館
 池田敏弘 1996 「瓦塔屋蓋部編年試論」『土曜考古』20 土曜考古学会
 稲垣晋也・斎藤嘉彦編 1991 『北野廃寺』岡崎市教育委員会
 稲沢市 1984 『新修稲沢市史』資料編6
 稲沢市教育委員会 1980 『塔の越遺跡発掘調査報告書』
 稲沢市教育委員会 1985 『儀良町埋蔵文化財発掘調査報告書』
 稲沢市教育委員会 1990 『東畑廃寺跡発掘調査報告書()』
 岡崎市教育委員会 1986 『真福寺東谷遺跡発掘調査報告書』

遺跡名	所在地	出土部位	主要文献	備考
勝部廃寺	大山市勝部	屋蓋	名古屋市博物館1985	寺院
江南市小折	江南市小折	屋蓋	名古屋市博物館1985	
音楽寺遺跡	江南市村久野	屋蓋・軸	宮川1996	寺院・数基が出土
門間遺跡	葉栗郡木曾川町門間	屋蓋	名古屋市博物館1985	集落
重吉城跡	一宮市丹陽町	屋蓋(軒先)	名古屋市博物館1985	
浄土寺(込野)遺跡	稲沢市込野町	軸?	稲沢市1984	集落・尾張国分寺南東方向
正楽寺遺跡	稲沢市儀長町	屋蓋	稲沢市教育委員会1985	寺院?・尾張国分寺西方
塔の越遺跡	稲沢市長野町	屋蓋	稲沢市教育委員会1980	集落
寺脇(大矢)遺跡	稲沢市大矢町	屋蓋・軸		集落
東畑廃寺	稲沢市稲島町	軸(壁体?)	稲沢市教育委員会1990	寺院
勝川遺跡	春日井市長塚町	屋蓋・軸	松原1992	寺院
弥勒寺廃寺	西春日井郡西春町	軸	西春町教育委員会1985	寺院
諸桑廃寺	海部郡佐織町	屋蓋	名古屋市博物館1985	寺院
甚目寺町新居屋	海部郡甚目寺町新居屋	仏像押型	名古屋市博物館1985	法性寺跡付近
清林寺遺跡	海部郡甚目寺町	屋蓋	丹羽1983	寺院・豊津駅家推定地付近
折戸80号窯跡	日進市米野木南山	屋蓋・軸・基壇	斉藤1978	窯
猿投古窯跡(黒笹8号窯跡ほか)	三好町	軸(六角塔など)		窯
黒笹31号窯跡	三好町	屋蓋		窯
神沢古窯跡	名古屋市緑区鳴海町	屋蓋	名古屋市博物館1985	窯
NN-286号窯跡	名古屋市緑区鳴海町亀ヶ洞	屋蓋(軒先・欄干)	名古屋市教育委員会1986	窯
伊保白鳳寺跡	豊田市保見町	屋蓋	豊田市郷土資料館1978	寺院
舞木廃寺	豊田市舞木町	屋蓋	梶山1993	寺院
郷上遺跡	豊田市鶯鶯町	屋蓋・軸(初軸)		集落
矢作川河床遺跡	岡崎市	屋蓋(六角塔?)		
真福寺東谷遺跡	岡崎市真福寺町	屋蓋・軸(初軸)	岡崎市教育委員会1982	寺院・中世墓地
市道遺跡	豊橋市牟呂町	屋蓋・軸	贅1997	寺院区画内での出土

第1表 愛知県内瓦塔出土地名表

- 各務原市教育委員会編 1983 『各務原市史 考古・民俗編 考古』
- 梶山 勝 1993 「舞木麿寺跡の出土遺物をめぐって」『名古屋市立博物館研究紀要』16 名古屋市立博物館
- 斎藤孝正編 1978 『折戸 80 号窯発掘調査報告書』日進町教育委員会
- 善端 直 1994 「北陸の古代瓦塔」文化財学論集刊行会編『文化財学論集』
- 高崎光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』74 - 3
- 高橋信明編 1983 『土田遺跡』
- 豊田市郷土資料館編 1978 『豊田市文化財調査集報』第6集
- 名古屋市教育委員会 1986 『NN - 286 号窯跡発掘調査概要報告書』
- 名古屋市博物館 1985 『尾張の古代寺院と瓦』
- 贄 元洋編 1997 『市道遺跡()』豊橋市教育委員会
- 贄 元洋編 1998 『市道遺跡()』豊橋市教育委員会
- 西春町教育委員会編 1985 『西春町史 資料編2』
- 丹羽 博編 1983 『甚目寺町文化財調査報告』甚目寺町教育委員会
- 松原降治編 1992 『勝川遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 松本修自 1983 「小さな建築 - 瓦塔の一考察 - 」奈良国立文化財研究所創立三十周年記念論集刊行会編『文化財論叢』
- 宮川芳照編 1996 『音楽寺遺跡発掘調査報告書』